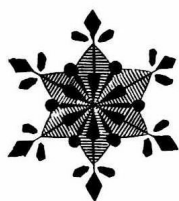


きらくにいこうぜ キックオフ

佐々木赫子著 広野多珂子絵





偕成社の創作

きらくにいこうぜ キ ッ ク オ フ

NDC 913

偕成社 190p 22cm

発行 1985年4月 初版第1刷

著 者 さ さ き かく こ
 佐 々 木 赫 子

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

〒162東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話(03)260-3221 振替 東京5-1352番

印 刷 新興印刷・小宮山印刷/製 本 文勇堂製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

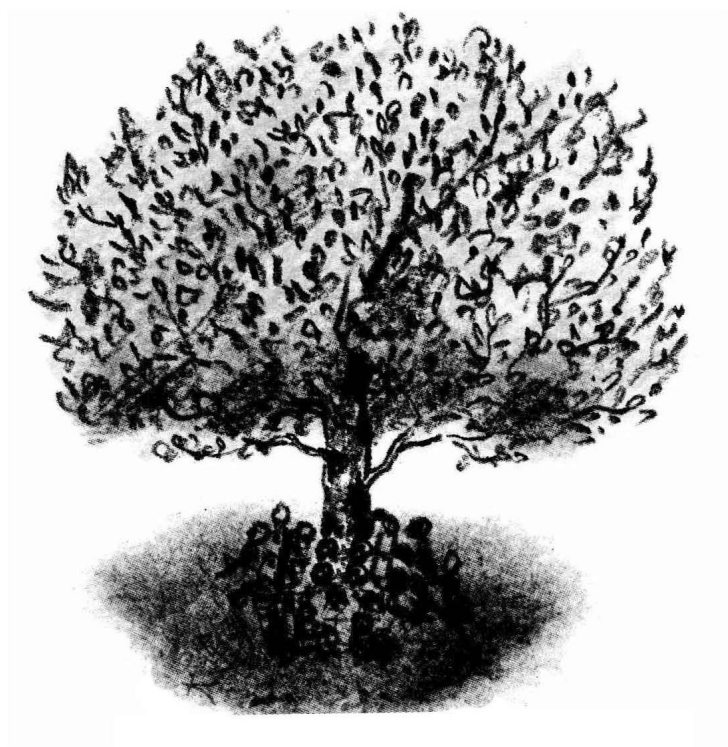
ISBN4-03-635240-3

Printed in Japan

© Kakuko SASAKI, Takako HIRONO 1985

きらくにいこうぜキックオフ

佐々木赫子 著 広野多珂子 絵



偕 成 社

はじめに

たのしいたのしい黄金時代。
おうこんじだい

時の翼に乗ったまま、
とき つばさの

このしあわせな黄金時代。

過ぎゆく月日と呼びもどしてよ、
す つきひ

その思い出のなつかしさ、

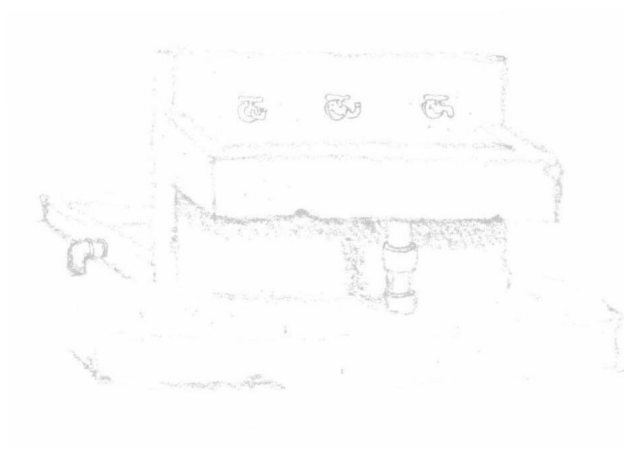
この年月はとび去るけれど、
としつき

このしあわせよ多くなれ。

—— L I I ワイルダー作

鈴木哲子訳

『この楽しい日々』より



きらくにこうぜ キックオフ／もくじ

その一 健太^{けんた}くんの生活^{いけん}と意見^{いけん}…………… 8

その二 晴れときどき曇^{くも}り…………… 38

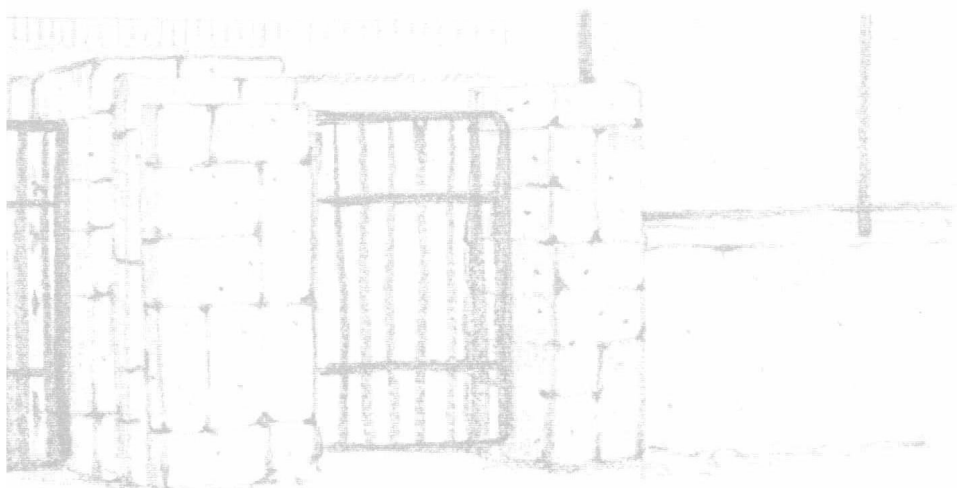
その三 お祭り少年…………… 66

その四 メンバー・チェンジ…………… 97

その五 旅は道づれ…………… 124

その六 ハーフ・タイム…………… 158

あとがき 190







著者・佐々木 赫子（ささき かくこ）

神戸市に生まれる。現在、日本児童文学者協会会員，〈てんぐの会〉同人。「あしたは雨」で日本童話会賞，「旅しばいの二日間」で日本児童文学者協会新人賞を受賞。著書に『旅しばいのくるところ』（児童福祉文化奨励賞）『勉強しないでいい点とれます』『あしたは雨』『同級生たち』（日本児童文学者協会賞・新美南吉児童文学賞）など。住所／日野市多摩平 3－9－15

画家・広野 多珂子（ひろの たかこ）

岡崎市に生まれる。マドリッドのシルクロ・デ・ページャス・アルテスに学ぶ。第3回蒼樹会新人選抜展週間賞，コレクター1000人が賞を選ぶ1980年展コレクター賞受賞。絵本に「ちいさなシリーズ」（6冊），さし絵に『あうのはいつも夕方』『同級生たち』などがある。住所／大宮市寿能町 2-198-1 寿能団地 5-404

装丁デザイン／山本利一

佐々木 赫子

きらくにいいこうぜ
キックオフ



けん た い けん 健太くんの生活と意見



思わず、「なんだ、もう真夏まなつかよ」といってしまいそうになるあつい朝だ。

健太けんたは家をでるのが、いつもよりおそくなる。

兄あにきがニキビよぼう予防の薬用洗顔クリームで、し

つくくしつくく顔をあらって、いつまでも

洗面台を占領していたせいだ。と、おそくなっ

たのは兄きのせいにする。ことにする。

としんせいかがいしや
都心の製菓会社につとめているおとうさんは、

いつもは朝はやくでかけるのだが、けさは健太^{けんた}

たちといっしょに朝飯あさはんを食くった。

きょうは休暇をとって、秋にひらかれる市民

合唱祭のうちあわせ準備会に出席するのだと

いう。おとうさんは市のアマチュア合唱団の責

任者にんしゃなのだ。

おとうさんといっしょに朝飯を食うと、つご

うのわるいことが一つある。

それは、うちにトイレが一つしかないことと関係がある。

けき、健太は食事のとちゅうで思いついて、おとうさんに申しいれ、ジャンケンをして勝っておいた。

「今週から週番が校門に立って、遅刻をとりしまっているんだよ。おくれていくわけにはいかないんだからね。」

ジャンケンの三回勝負をやらないかと提案するおとうさんを、健太はそういつてしりぞけた。きめられた登校時間におくれるとどうなるか。健太は去年一年間で経験済みだ。

まず、校門にがんばっている生活委員会の週番に、胸につけている名札をとりあげられて、名まえをノートにつけられる。そのノートを、生活委員長が週末の全校生徒集会で読みあげる。ノートに名まえを記録されているものは、壇上にひとりずつのぼらされて、あらためて自分の氏名を名のり、「遅刻をしてすみませんでした」といわされる。

「全校生徒のまえでいわされるんだぜ。あんなみつともない、はじくさいことはねえよな。」兄きも身におぼえがあるとみえ、うなずいた。

週番による遅刻とりしまりは、兄きが中学にいたじぶんより、ずっと以前からのことだ

そうだ。それもはじめのころは、週番が名まえをノートに書きとめるだけだったのに、で
たためな名まえをつげるものがあらわれ、それが名札をとりあげるものになったらしい。

名札も、兄きたちのころは週番がその場でかえしてくれていた。

「ぼくたちのころ、名札一つ百円だったからね。ちがう名まえの名札をいくつも買いこん
で、校門とおるときだけ、自分のとつけかえることを思いついたやつがいるんだ。」

「へえ。アタマいい！」

おかあさんがうれしそうにいった。おかあさんは新聞の三面記事のなかでも、とくにさ
ぎ事件の話^{じけん}をこのむたちがある。

「とりあげられた名札を職員室へいって、担任をとおしてかえしてもらうようになったの
は、でも、そのときからだといううわさだぜ。」

生活委員会は、各クラスからえらばれた生徒による組織だ。が、兄きにいわせると、顧
問の先生が会の活動計画に、ああしろこうしろと、やたら口だしするのがふつうだそうだ。

「けしからん。」

おとうさんはうなり声をあげた。

「こまかいことをいちいち、ぐちゃぐちゃとりしまって、どこがいいんだ。バカめ。ぼく

らのころは、期末試験きまつしけんのときでも、教師は答案用紙とうあんようしをくばるだけで、さっさと教室をでて
いってしまつて、あとは生徒を信頼しんらいしてたもんだ。」

「その話、もう何十ぺんもきいたよ。」

健太けんたは大いそぎで、おとうさんがながながとしやべりだしそうなのはいに、水をさす。

「おとうさん。時代じだいがかわつてんだよ。もうおとうさんやおかあさんのようなミンシュ主しゅ
義ぎの時代じだいじゃないんだよ。」

兄あにきが、老人ろうじんを説得せつとくするような根氣こんきづよい口調くちようで、いった。

「ほんとに、うちの親はいやだよ。」

健太けんたはトーストのさいごのひと口をのみくだしながら、もぐもぐいった。

「なにかつていうと、すぐ、むずかしいことばつかつて。管理かんりがどうの、人間のナントカ
がどうのつて。ごちそうさまア。——おとうさん、考えてごらんよ。へ赤くて白くてたべら
れないもの、なあに。」

健太けんたは立ちあがつて、トイレにかけこんだ。

しばらくしてでてくると、おとうさんはひとりだけ食卓しょくたくにのこつて、まだ朝飯あさはんのつづき
を食くつていた。メシとフロとトイレがながいのは、おとうさんのくせだ。

おかあさんのほうはそのそばで、ぎょうぎわるくたたみに横よこになって、片かたひじついて新聞しんぶんを読よんでいた。

健太けんたの家には、ダイニングキッチンはない。台所だいどころとたたみじきの茶の間ちやまがあつて、食事しょくじはこの茶の間ちやまでとるのである。家をたてるとき、兄あにきと健太は、よその家のようにテーブルといすで、かつこうよく食事をしたいといった。が、ねころべないのはいやだと、おかあさんはいはつた。おとうさんはいつでも、見さかしくなくおかあさんにさんせいするたちで、このダイニングキッチン論争ろんそうのときも、むすこたちの味方みかたにならなかった。

「へ赤くて白くてたべられないものゝつて、なんだ。」

おとうさんは、健太けんたがトイレからでてくるのをまっていたように、たずねた。ずっと考かんがへつづけていたとみえる。健太のほうでは、そんななぞなぞをふっかつたことさえ、わすれてしまつていたというのに。

「くさつた紅白こうはくまんじゅう。」

（わが親ながら、まつたく、やつてられないよ。）

「なるほど。赤くて白くてたべられないか。」

おとうさんは感心かんしんしたようにつぶやきながら立ちあがつて、トイレへいった。

健太は洗面所があくのをまつあいだに、サッカーシューズ入れを手入れすることにした。

チャックのすべりがわるいので、ろうそくをこすりつけながらおかあさんに話しかける。

「ねえ、おかあさん。西って、頭おかしいんじゃないかと、ときどき思っちゃうよ。」

西くんはおなじクラスの生徒だ。

「ふうん。どういうところが。」

おかあさんは新聞をめくりながらきく。

「ほら、女の人が月にいちど、おなかがいなくなって保健室へいったりするじゃない。ツ、

キ経って書く、ほら、あれ。あれのことを西ったら、ぼくに『健太、おまえ、なったこと

ある？ どんな気分がするものなの？』ってきくんだよ。バカじゃないかしらん。——あ、

おかあさん、おかあさんのからだの下にいるの、ゴキブリじゃないの。」

たしかに、おかあさんのわき腹がたたみにふれているへんに、黒っぽいものが見えた

と思う。

おかあさんは上半身をおこした。

やはり、ゴキブリだ。ただし死んでいる。

「またゴキブリのでる季節となりけり、か。ふむ、これはチャバネゴキブリだわ。」

おかあさんはゴキブリの死しがいを指でつまみあげて、ひょいとわきへのけると、そのま
ま、またごろりと横よこになった。おかあさんは家族かぞく四人のなかでいちばんやせていて、から
だも小さいのだけれど、動作どうさはいたってのっさりしている。

「月経げつけいって読むんだよ、健太けんた。」

おかあさんはそういうと、新聞をまためくって読みふけりはじめた。

健太けんたは時計を見た。

（兄あにきのやつ、日が暮くれるまで顔をあらってゐるつもりか。）

「おい、いいのか。八時二分すぎだぜ。」

健太けんたが洗面所せんめんじょをのぞいて声をかけると、兄あにきはとびあがった。

「げっ。もうそんな時間じかんかよ。じょうだんよしこさん！」

兄あにきは顔をひとふきし、しめったタオルを健太けんたになげつけると、どたどたでいった。

健太けんたはにやりとした。

ほんとうはまだ八時五分まえだ。

（兄あにきは弟かみに感謝かんしゃすべきさ。きょうだけは、足すべらせて階段かいだんにあごぶつけて、舌したをかみ
きる心配しんぱいしなくてすむだろうよ。）

兄あにきの高校は、国電こくでんでひと駅えきのところだ。駅かいたんの階段を毎朝、二段ずつとびながらかけのぼったりかけおいたりすると、自分でいっている。

やっとあいた洗面台せんめんたいで、健太けんたは兄あにきの薬用洗顔やくようせんがんクリームを失敬しつげいして、たっぷりあわだて、いいねいに顔をあらった。そのあと、寝ぐせがついて耳の上に、角つのみたいピンとはねあがっている髪かみの毛を一たば、ヘアスプレーとドライヤーの助けたすを借りて、やっとこさねかせつけた。それから、教科書やノートのはいつているスポーツバッグをつかんどとびだしかけ、弁当べんとうをいれなかったと気づく。健太のかよっている市立中学校は給食きゅうしょくがない。

はきかけのくつをけとばしぬいで台所だいどころへ走りこむと、調理台ちようりだいに、弁当箱べんとうばこが置いてあった。おかあさんはごはんとおかずをつめて、さますために、ふたをあけたままにしている。それはいつもとおなじだが、けさのようにいそいでいると、つつんでないのが腹はらだたいい。

「なんだ。つつんでないのか。」

ひきだしから弁当べんとうつつみ用の布ナプキンをだしながら、きこえよがしに舌したうちする。

「弁当べんとうがつつんであるのが、まるであたりまえみたいないかたするじゃないの。」

茶ちやの間まのおかあさんがききつけて、のんびりいう。

「つつんでないのは知ってたし、つつんでくれとたのまれれば、ことわるつもりもなかっ